



## スパイごっこ

### 三浦しをん

子どものころ、本のページをめくるのが好きだった。内容をちゃんと読んでいたのではない。本によってちがう手触り、紙のこすれる音、日に灼けて黄ばんだ色合い、埃っぽい香り、ページが巻き起こすかすかな空気の揺らぎが、好きだったのだ。つまり、ちよつと紙フェチなのだ。

絵や文字を紙に書いたり印刷したりすることに、遠い場所にいるひとの思いや、異世界の情景が、私たちの手もとに届く。「こんなに薄くて軽いのに、紙つてのは、すごいやつちゃんあ」と思う。でも、もつとすごいのは、折ったり丸めたりひねったりできることだろう。

私が子どものころに没頭したのは、ページめくりだけではない。「こより作り」にも夢中だった。ティッシュペーパーやトイレットペーパーや半紙を細長く切

り、できるだけ強靱で一定の太さの、うつくしいこよりを作るのに腐心した。

作ってどうするかというと、べつにどうもしない。「できたあ！ きれいだ」と満足するのみだ。子どものころの私は、いまよりも輪をかけて暇だったようである。たまに、こよりの先を鼻の穴に入れて、強制的にくしゃみを引き起こしては、一人で笑っていた。すごくすごく暇だったようである。

そうだ、両開きの戸棚の取っ手をこよりで結び、スパイごっこもしていた（一人で）。「スパイは玄関口や機密書類の入った戸棚にこよりを結び、それがちぎれていないかどうかを見て、侵入者の有無を判断する」というのを、なにかの本で読んだのだ。私は、宝物のおはじきやビー玉や拾ってきた石などを戸棚にしまったのだが、こよりを結びつけておけば、勝手に開けられたときにすぐわかる。勝手に開けられたとしても、犯人は空き巣以外では両親しかいなかったのだが……。

いつ、こよりがちぎれているだろうと思って、ドキドキしながら取っ手を観察した。ビー玉を眺めたいときは、唾でこ



三浦しをん(みうら・しをん) ●東京生まれ。2000年、「格闘する者に〇」でデビュー。06年、「まほろ駅前多田便利軒」で第135回直木賞を受賞。小説作品に「風が強く吹いている」「神去なあな日常」「星間商事株式会社社史編集部」「まほろ駅前番外地」「天国旅行」など、エッセイに「悶絶スパイラル」「ピロウな話で恐縮です日記」など、著書多数。

よりを湿らせ、自分でちぎって戸棚を開けた。もちろん、ビー玉を眺め終わったら、すぐに新しいこよりを作って結びつけておく。

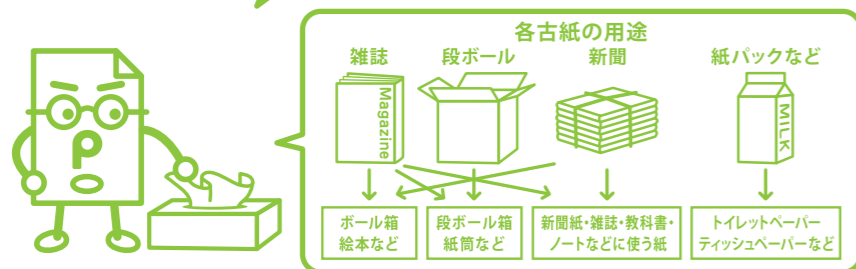
しかし、結んだこよりは微動だにしないままだった。なぜ、スパイ(私)の戸棚を狙うやつが現れぬのか！ 私は侵入者を待ち望んでいた。たまに母が、「これ、ほめていい？」と聞いてきた。「うん」と答え、戸棚から物を取りだす母を横目に、こより作製に励んだ。

そのうちスパイごっこに飽き、戸棚の開閉に支障をきたしもするので、取っ手にこよりを結びつけるのはやめてしまった。だが、いまでも細長い紙があると、無意識のうちにこよりを作ってしまう。喫茶店では必ず、ストローの袋をこよりにし、複雑怪奇な形に結んでいる。手のなかで柔らかく形を変えていく紙の感触が、私はとても好きだ。

## ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

### 回収された紙、次は何になる？

段ボールはまた段ボールに。紙パックはティッシュやトイレットペーパーに。そうやって、一度使われた紙は回収されて、また新しい紙へと生まれ変わっていくんです。あなたが毎日いろんな場面で使っている紙とも、またどこかで会えるかも。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。

<http://kamitsubu.com/>

◆次回は6月3日号、新井満さんです。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

photo : Shiro Miyake